

プロイセンの警察大尉 フリードリヒ・ヴィルヘルム・ヘーン展

今年は明治維新150周年にあたる年です。この機会にむけて、私は明治期のお雇い外国人であるヴィルヘルム・ヘーンについての準備を2015年から進めておりました。そして、この8月2日によく特別展という形で実現する運びとなりました。

ヴィルヘルム・ヘーン（1839-1892）は、ドイツとポーランドの国境に位置するオーダーブルフ地方に生まれました。ヘーンの故郷であるギュステビーゼは、第二次世界大戦以降、ポーランドに属しています。

ヘーンは、プロイセンの警察大尉として1885年に日本政府に招聘され、1891年まで清浦奎吾とともに警察制度の改革に取り組みました。

彼は日本に赴任してから初めの3年は、警官練習所で教鞭をとりました。また、日本滞在期間を通して 交番・駐在所制度の拡充に尽力し、北海道から福岡、熊本、鹿児島、さらには奄美大島にいたる日本全国の警察組織を視察してまわりました。

この視察旅行については報告書が残っています。その期間中、特に1889年から1890年にかけて、ヘーンは個人的な日記も書き残しました。ヘーンの足あとは現在の日本でも見つけられます。好個の例は、隅田川とスカイツリーの間にある三囲神社（みめぐりじんじゃ）にあるヘーンの石碑です。



この石碑は帰国直後、1892年に亡くなった「日本警察の父・ヘーン」のために、1894年に清浦奎吾、山県有朋、553人の卒業生によって建てられたものです。

特別展を開催するにあたり、ひとつひとつの資料を調査する過程で、ベルリン警察史博物館においてヘーンの遺品と日記を見つけ出したことは大きな成果でした。それと言うのも、ヘーンの遺品は第二次世界大戦後に消失したとされていたからです。これらの遺品と同時に出てきた日記も、興味深く、ユーモアにあふれております。友人の協力を得て、この古い日記を書き起こすことができたので、こちらの資料は展示会のカタログにも載せる予定でおります。その時には、日独が共有する警察制度史に関わる他の資料もご紹介できればと思います。

ヘーンの経歴やヘーンの日本における功績に関する資料を探し、読み解くことで、この展示が、これまで散り散りになっていたこれらの資料を体系づける一助になることを願っております。

この特別展は弊館で8/2から12/20まで展示されたあと、ベルリン警察博物館で展示され、さらにブランデンブルク州にあるヘーンの故郷にも巡回することが決まっています。

ヘーンと鷗外は同時代人です。ヘーンが日本にいた頃に、鷗外はドイツにいました。そして両者とも山県有朋と関係する人物です。ただし、これらの点をのぞいては、今回の特別展は鷗外と直接関係があるとは言えません。それでも、私は鷗外記念館の勤務の集大成として、定年を控えて、故郷であるブランデンブルク州と日本をつなぐプロジェクトをしたいと思います。同郷のヘーンは、私のみならず、皆さまにもその数奇な人生を見せてくれるでしょう。

ベアーテ・ヴォンデ
(本展示会キュレーター)

